



TITLE:

吉田城さんのこと (吉田城先生追悼
特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

石井, 洋二郎

CITATION:

石井, 洋二郎. 吉田城さんのこと (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏
文研究 2006, S: 342-344

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138048>

RIGHT:

吉田城さんのこと

石 井 洋二郎 Yojiro ISHII

吉田城さんの訃報に接してから、早いものでもう9か月になる。

平成13年度から吉田さんが代表者となって「フランス文学における身体——その意識と表現」というテーマの科学研究費プロジェクトがスタートし、私もその一員に加えていただいて、何か月かに一回のペースで催される研究会に参加するため京都を訪れるのがここ数年の楽しみになっていた。吉田さんはもちろんご自分でも何度となく刺激的な発表をなさったが、その一方で多様なメンバーの発表にそのつど適切なコメントを加え、しばしば本質を突いた鋭い質問を発したかと思うと、すぐにまたユーモアあふれる話術で雰囲気のを和らげるといった具合に、まさに一座の中心としていつも見事なまとめ役ぶりを発揮してこられた。

この研究会は一昨年（平成16年）の12月の集まりが最終回で、ほどなく報告書も無事できあがったが、これと並行してさらに内容を充実させた単行本を作ろうという話もちあがり、昨年の前半にはその刊行に向けた具体的な作業が進むはずだった。ところがその後なかなか音沙汰がなく、どうしたのかと思っていたところへ突然の訃報である。聞けばしばらく前から体調を崩して入院されていたとのこと。腎臓に病を抱えておられたことは承知していたが、まさかこれほど唐突に事態が急変しようとは夢にも思わず、電話で知らせを受けたときはしばらく呆然としてしまった。

吉田城さんの噂を初めて耳にしたのは、私が東大仏文の大学院に入学して間もない頃だ。上の学年にとにかくすごい秀才がいる。その語学力たるや群を抜いていて、仏文研究者のあいだでも10年に一人の逸材と言われている……。もちろん先輩の院生たちはみなそれぞれに何らかの「伝説」の持主であったが、中でも吉田さんにまつわるそれはひとときわ輝いていた。法学部からいわば「傍系進学」してきた私のような者にしてみれば、文字通りに正統の中の正統ともいべき存在で、眩しいことこの上ない。いったいどんな人なのだろうと興味は募ったが、まもなくフランス政府給費留学生として旅立たれたため、研究室で何度か言葉を交わす程度のことはあったものの、授業でご一緒する機会はほとんどないままに終わってしまった。

はじめて親しくお話したのは、私が渡仏してまもなく、カルチエ・ラタンのレストランで開かれた集まりでのことだったと思う。留学生仲間の中心にあ

って爽やかな弁舌をふるう吉田さんは予想通りの才気煥発ぶりだったが、その自信にあふれた迫力に圧倒されながらも、およそ秀才にありがちな「斜に構えた」ところの微塵もないお人柄に接して安心したことを今でも鮮明に覚えている。吉田さんが博士論文の公開審査に臨まれたときは私も傍聴させていただいたが、居並ぶ審査員の質問にたいして流暢なフランス語で見事な答えを次々と返していく姿はまことに颯爽としていて、同胞としてちょっと誇らしい気分がしたものだ。

帰国後、やがて京大教養部に赴任した私は、今度は同僚として吉田さんとおつきあひすることになった。それから私が東京に移るまでの4年半は、文学部での論文審査やフランス人の講演会などでしばしば一緒する一方、お宅にお招きいただいたり（奥様の典子さんはもちろんだが、吉田さんご自身も「エクセラン・キュージニエ」であったことは有名だ）、拙宅にもお越しいただいたり、公私ともどもいちばん接触の多い時期であったように思う。もちろん私が京都を離れた後もそれなりに交流は続いていたが、なかなかゆっくりお話しする機会には恵まれないまま齢を重ねてしまった。それだけに、はじめに述べた科研費の研究会は私にとってもたいへん貴重な場だったのである。

吉田さんは私より一歳だけ年長にすぎなかったが、いつも数歳年上の兄貴分という感じがしていた。それはもちろんこちらの勝手な思い込みだったかもしれないのだが、とにかく色々な面で吉田さんが常に同世代のトップランナーとして先頭を走ってこられたことは、誰しも認めるところだろう。おそらく常人の二倍、いや三倍以上の速度と密度で、人生を駆け抜けてこられたのではあるまいか。質量ともに、私などが百歳まで生きたところで到底達成することなど叶わぬほどの仕事をすでに成し遂げておられた。だからこそもっと長生きして、さらに誰も追いつけぬほど遠くまで走っていただきたかったという思いが残らないではないが、今はむしろ、そんなに遠くまで行かなくても、こちらと歩調を合わせてもっとゆっくり歩いてくればよかったのという無念さのほうが強く湧いてくる。

フランス留学時代、吉田さんのお書きになった追悼文を読んだことがある。日比谷高校時代の同級生で、当時東大法学部の助手として将来を嘱望されながら20代の若さで夭折した友人の死を悼む文章であった。むろん27、8年も前のことゆえ細部は忘れてしまったが、吉田さんは当の友人のことを確か「自分が逆立ちしてもかなわない人間」といった言葉で形容し、「神々の愛でし人ほど早く召されてしまう」という意味のことを書いておられたように記憶している。あの吉田さんがここまで言われるくらいなのだから、その方は本当にたぐいま

れな秀才だったのだろう。じっさい、別の方面からもその方の噂は耳にしたことがある。しかし私にとってはまさに吉田さんこそが「自分が逆立ちしてもかなわない人間」であり、「神々の愛でし人」のひとりであった。

世界の頂点に位置する研究者としての卓越性はもとより、数多くの若い優秀な学生を育てられた教育者としての実績、身に降りかかる膨大な雑務を精力的にこなしてこられた大学人としての有能さ、そして万人の信頼と尊敬を集めてこられた明朗闊達なお人柄——吉田さんはあらゆる面で常人の域を遥かに越え、しかもすべてがみごとにバランスのとれた稀有な存在であった。そんな方がこんなにも早く「召されて」しまったのは、やはり神々に愛でられたがゆえなのだろうか。だとすれば、神々とはずいぶん身勝手なものである。

(いしい・ようじろう 東京大学大学院教授)